原高同窓會々報

題字は前同窓会会長門馬直孝氏

3月1日　日曜日
平成27年（2015年）

発行所
福島県立原町高等学校
同窓会
福島県南相馬市原町区西町3－380
電話　(0244) 23－6196
印刷所　有限会社ライト印刷

祝 ご卒業

原高の伝統を確かに引き継いでくれた一五五名

本日晴れて卒業

本日、福島県立原町高等学校　第67回卒業証書授与式が挙行されます。新たに会員となる一五五名のご活躍を心からお祈りします。

生かされて生きる

同窓会会長　渡辺一成（十四回卒）

あの震災から間もなく五回目の三・一一を迎えます。未曾有の大震災、想定外の原発事故、経験したことのない避難生活など極めて困難な中での高校生活を終えて本校を巣立つ皆様に、心からの祝意と敬意を表します。

皆さんの原高生活は震災の翌年、非難された方が多いために定員に満たない中でのスタートとなりましたが、学習に、部活動に精励され、無事卒業を迎えられました。

この間に行われた合唱祭や吹奏楽部の定期演奏会、何よりも仮装行列を伴う柏曜祭の開催が地域の皆様に大きな希望と勇気を与えてくれたことを忘れることはできません。こうした学校行事などが滞りなく行うことが出来たことは、皆さんの努力は勿論ですが、同窓会東京支部をはじめ多くの同窓生の皆さんや地域の皆さんの支えがあったことを忘れないでほしいと思います。

吉野弘さんという詩人の「生命は」という詩の一節をご紹介します。

『生命は自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
花も
めしべと雄蕊がそろっている
だけでは
不充分で
虫や風が訪れて
めしべとおしべを仲立ちする
生命はすべて
その中に欠如を抱き
それを他者から満たしてもらうのだ
・・・・
わたしも　あるとき
誰かのための虻〈アブ〉だったろう
あなたも　あるとき
私のための風だったかもしれない』

私たちが「生かされて生きている存在である」ことを改めて感じさせられます。

震災後、「絆」という言葉がいろいろな場で語られましたが、三年間の原高生活の中で、支えあう心が大事であることは十分に学びとったことと思います。

皆様はこれから変化の激しい荒波に船出するわけですが、原町高校での思い出を胸に、明るく元気に進まれ、人のために虻になったり風になったりできる人に成長されることを希望し、祝辞とします。

校舎の今と昔

古いアルバムから

現在

変わらないもの

校長　松岡浩三

前途洋々たる百五十五名の卒業生が、本日より同窓会の一員として加えていただくこととなりました。明日から、新しい世界へ飛び込む卒業生へ温かい御支援・御指導をいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、校長として原高に赴任して1年が経ちましたが、明るく規律ある校風と素直で活気に満ちた生徒達に感謝する一年でもありました。

しかし、震災以降の相双地区の急激な状況変化にはとまどいを隠せません。双葉、富岡、浪江、双葉翔陽の各校が平成二十九年度より休校、そして新たに「ふたば未来学園高校」が今春開校の運びとなります。この原町高校も次年度から全学年四クラスの中規模校として再スタートします。全校生一〇〇〇人規模の原高時代を過ごされた同窓生にとっては何ともやりきれないものがあると思いますが、たとえ中規模校であったとしても、存在感のある進学校としてこれからも努力していく所存ですので、今まで同様のご支援を賜りますようお願いいたします。

先日、同窓会担当の教員が、古いアルバムが見つかったということで校長室に持ってきました。約四十年前、校舎が小川町から現在の西町に移転したばかりの写真で、第一体育館はまだ鉄筋の骨組みしか装されておらず、原高のシンボルマークである金木犀の大木もまだ若木で、葉っぱの量も少なく向こうが透けて見えるほどです。

南側校舎の桜並木を、当時の生徒が自分たちで苗木を植えている様子が写っていました。その生徒たちの写真を見て一瞬驚きました。その白黒写真には、現在と全く同じセーラー服と学生服のひたむきな生徒の姿がありました。これほど長い年月を隔てていても、変わらない原高がそこにあったのです。こんなことは由緒正しい伝統校でなければありえないことです。たとえ時代や環境が変わろうとも、このすばらしい伝統をこれからも大事にしていきたいと思います。

平成27年度
原町高等学校同窓会総会
8月8日㈯ 17：00～
『ロイヤルホテル丸屋』（原ノ町駅前）
多数のご参加をお待ちしています。
お問合せ　原町高等学校同窓会事務局
TEL 0244(23)6196　FAX 0244(23)7909